

# トゥルシーダースが16世紀のヒンディー語で詠った 『ラーマの行いの湖』の梗概（あらすじ）と詩の邦訳

坂田 貞二

## この梗概と詩の邦訳の意図

筆者は二つの共同研究に加わり、下記のような論文や文書を書く機会を得てきた：

1. 拓殖大学の村上 祥子教授主宰の共同研究〈諸文化圏・諸言語圏の呪い・穢れ・占い・迷信〉の論文として、「ヒンディー文学における「呪い」と「予言・夢」——叙事詩『ラーム チャリト マーナス』で16世紀のトゥルシーダースが詠い訴えようとしたこと——」（『拓殖大学 語学研究』第139号（2018年12月刊、pp.29-50）を執筆。
2. 同じ共同研究〈諸文化圏・諸言語圏の花〉の論文として、「16世紀にトゥルシーダースが詠った叙事詩『ラーマの行いの湖』で天から降る花——誰がどのようなときに誰に花を降らせたのか——」（『拓殖大学 語学研究』143号（2020年10月刊、p.63-88）を執筆。
3. 東京外国語大学の水野 善文教授の共同研究〈多言語重層構造をなすインド文学史の先端的分析法と新記述〉で、2015年7月に筆者がラーマ物語のとりまとめを担当することになり、「ラーマ物語の諸相—2015.10.10の文学史研に向けて坂田の準備」をラーマ物語に関心のある参加者に配った。その要点を抜粋したつぎの小論は未刊・未配布のみである：

「トゥルシーダースの『ラーマの行いの湖』は、ヴァールミーキによる古代叙事詩『ラーマヤナ』を参酌するところがのだが、ほかのラーマ物語をも参照して16世紀の北インドの人々の望みを叶えたい」

筆者はこのようにラーマ物語に少なからぬ関心を寄せ、なかでもヒンディー語のアワディー方言で16世紀にトゥルシーダースが詠った *Rāmcaritmānas*（『ラーマの行いの湖』）に惹かれてきた。そしてトゥルシーダースがヒンディー語のアワディー方言で16世紀に詠った『ラーマの行いの湖』全編を読み、およそ12,800行ある作品全体をほぼ邦訳しおえた。しかしその膨大な作品を「読んでください」と日本の読者に頼めるものではない。

そこで『ラーマの行いの湖』の第I編から第VII編までの全編につき、七ページほどで梗概（あらすじ）を示し、その根拠となる詩の邦訳を掲げる。それにより日本の多くの読者が、トゥルシーダースによる『ラーマの行いの湖』に親しんでくれることを期待したい。

具体的には、

- ①トゥルシーダースの『ラーマの行いの湖』の梗概（あらすじ）を述べ、
- ②そのあとで梗概の根拠となった詩の邦訳を、二字と三字さげて示した。

詩では、つぎの形式のものがトゥルシーダースのラーマ物語を形成している。

- ・チャウパーイー *caupāī* は、四句（ときに十句以上）で、ラーマをはじめとする人物の動きの詳細を描写する。原文の各句二行を邦訳でも二行にした。
- ・ドーハー *dohā* は、チャウパーイーのあとに詠われ、物語の大筋を示す。これも原文の二行を邦訳で二行にした。チャウパーイー数句により詠まれた詳細をドーハー一句でまとめるのが、このラーマ物語の基本である。
- ・このほかに I～VII編までははじめの部分に、サンスクリット語による韻文シュローカ *śloka* が数句、ついでヒンディー語の韻文ソーラター *soraṭhā* が配されていることが多い。シュローカは各編の全体像を示し、ソーラターは人物の動きの詳細を表わすことが多い。
- ・またところどころに配されるチャンド *chand* は、人の心情や物語の大筋を示すことが多い。
- ・シュローカ、ソーラター、チャンドの原文の長さは一定でないが、これらも原文と同じ行取りと句読点で邦訳した。
- ・著者は全体で約12,800行ある『ラーマの行いの湖』を読み邦訳したが（未刊）、ここに示す詩は文脈を明らかにするためにその邦訳と異なる場合がある。

詩の形式と番号は、梗概（すじがき）に続いて書かれる詩の邦訳のあとの（ ）内にカタカナと数字で示した。

#### 『ラーマの行いの湖』の構成、テキスト、参考文献

トゥルシーダースにより16世紀に詠われた『ラーマの行いの湖』全編は、ヒンディーのアワディー方言で編まれ、つぎの七編から成る。

第Ⅰ編 幼年編	第Ⅴ編 美麗編
第Ⅱ編 アヨーディヤー編	第Ⅵ編 ランカー編
第Ⅲ編 森林編	第Ⅶ編 後編
第Ⅳ編 猿国編	

全編でおよそ12,800行あるテキストとして、原文と現代ヒンディー語による説明からなる下記のものを用いた：

Poddār, Hanumān Prasād (ed.). *Śrīrāmacaritmānas*, Gorakhpur: Gītā Pres, 1961.

参考文献はいろいろあるが、下記を頻繁に参照した：

Stasik, Danuta, *The Infinite Story: The Past and Present of The Rāmāyaṇas in Hindi*, Delhi: Manohar, 2009.

## 第Ⅰ編 「幼年編」の梗概と詩の邦訳

ラーマ物語はこれまで、古譚・聖典・経典などで古典的な雅語サンスクリット語の系統の言語によって書かれてきたものが多い。しかし16世紀のトゥルシーダースは、当時の民が話していた俗語ヒンディー語のアワディー方言で、ラーマとその一族のことを詠おうとして『ラーマの行いの湖』を著わした。

諸々の古譚・聖典・経典などと、

ヴァールミーキによる『ラーマヤナ』やほかの書を聴き、

トゥルスィーダースはラーマラグ族のことを、

自らの悦みのために民の言葉で詳しく記す。

(ドーハー 1 の シュローカ 7)

このヒンディー語による詩編『ラーマの行いの湖』は、うえに記されたように作者のトゥルスィーダースがラーマ物語の詩祖ヴァールミーキの作品ほかを聴き、ヴァールミーキの御足に礼をすることからはじまる。

ヴァールミーキ仙の御足にトゥルスィーダースは礼拝、ラーマの物語を編みし詩祖に、

羅刹登場のラーマの物語、壮麗に編みしヴァールミーキ仙に。

(ソーラター 14 gha)

この物語の主人公たるラーマは、理想のときにヴィシュヌ神の化身として母カウサルヤから降誕する。始めのうち母の妃は自分から神が降誕したことを喜ぶが、しばらくして自分が生んだ子が泣き笑いする普通の赤子になることを望む。ラーマはそれに応え、赤子として泣きだす。なおラーマには、同じころに生れた三人の弟の王子がいた。

清らかなチャイトラ月の満月に向かう九日目 ラーマの好むその時刻。

午後で寒さも暑さもなくて 世界が平穏なときにラーマが降誕。

絵①

(ドーハー 191 の チャウパーイー 1)

母は心が変わりかく言いたり、なれラーマは神の姿を捨て、

子どもの遊びを大いにせよ、それがわれにとりて真に幸い。

母のこの言を聞き神の神たるラーマは、赤子になり泣きはじめる、

詩人トゥルスィーはこのさまを詠い、神の御足を戴き穢れにまみれる。

(ドーハー 192 の チャンド 4)

この王子らがいくらか成長したところを見計らい、家祭僧ヴィシュヴァーミトラがダジャラタ王に「ラーマとラクシュマナの二王子をわたしに委ねてください」と懇請したので、王は家祭僧に二王子を委ねた。

王は王子らを仙人に委ね、祝いの言葉を王子らにかける、

ラーマは母のもとに赴き、暇を乞いて御足を戴く。

(ドーハー 208 ka)

聖仙とともに進むうちに、二人の王子はヴィデーハ国の花園に行った。そこでラーマ王子とスィーター姫が姿を見あい、互いに惹かれる。

四方を見渡した王子らは 庭師らに声をかけ花を摘む。

そこにスィーター姫がやってくる 母にいわれてパールヴァティー女神を拜むため。

お供の一人が姫スィーターから離れ 庭園の花を見に行けり。

お供はそこに二人の王子を見て 喜びに満ちスィーター姫の許に戻る。

(ドーハー 228 の チャウパーイー 1、4)

二人が森を見に来ました 二人ともまだ若いけれど見事なお姿をしています。

一人の肌は褐色でもう一人は色白です その美しさをわたしは表わせません。

その言葉にスィーター姫は惹かれ お姿を拝したきものと目が潤む。

見て来たお供のうしろに姫スィーターが 昔からの愛を誰にも察せられないように。

(ドーハー 229 の チャウパーイー 1、4)

スィーター姫の腕輪と足の飾りの音を耳にして ラーマは考えラクシュマナにいう。

愛の神が太鼓を叩けり 世界を制覇するがごとく。

ラーマは音の方を振りかえる 花の陰のスィーター姫はラーマに目を注ぐ。

ジャナカ王のご先祖ニミが 瞬きをすっかり忘れたがごとく。

(ドーハー 230 の チャウパーイー 1、2)

そのあとに行われた弓取り式では、シヴァ神の強弓を持ちあげた者がスィーター姫を娶れることになっていた。だが招かれた王侯は誰もそれができず、ラーマ王子だけが弓を持ちあげられた。そしてラーマはスィーターに勝利の花環をかけられ、神々に祝われ花を降らされる。

剛弓を二つに折りラーマは大地に投げる そのさまを見て人はみな幸せ。

師ヴィシュヴァーミトラの大海に 愛の形の浄なる水が満つ。

(ドーハー 262 の チャウパーイー 1)

ラグ族の勇者の胸に輝く花環を見て 神々は数多の花を降らす、

居並ぶ王侯はそのさまに恥じて 陽光のまへの睡蓮さながらに身が縮む。

絵②

(ドーハー 264)

そしてラーマ王子とスィーター姫が結婚する。

花婿・花嫁の掌を重ねさせ、両家の師は法螺貝を鳴らす、

花婿が花嫁の掌を受くる儀がなされ、神々と人々は歓喜に満てり。

幸いもたらず花婿を見て王と妃、喜悦に心と身が震える、

慣いと聖典に則り、王の王たるジャナカは娘を与える。 (ドーハー 324 の チャンド 3)

その折りにラーマの第三人とジャナカ王の身内も結婚する。そして四組の新夫と新妻は、王子らの都アヨーディヤーに帰還して民や母の妃らに歓迎される。

祝いの水壺が家々に置かれ、それぞれの家が立派に飾られる、

最高神ら神々は、都アヨーディヤーを見て恥じる。

(ドーハー 344)

金の皿に祝いの品を盛り、母らはそれを蓮のごとき手に持つ、

母らは結婚を祝う儀式に行く、身体が喜びに震えながら。

(ドーハー 346)

こうして新婚の四組を都に歓迎する喜びのなかで、第I編の「幼年編」は終わる。

## 第II編 「アヨーディヤー編」の梗概と詩の邦訳

スィーター妃を妻にしたラーマは、年老いたダシャラタ王に代わり長子として王位につくべく、まずは立太子の礼を行うことになりその準備が行われていた。ところがバラタ王子の母カイケーイー妃は、ダシャラタ王と「望みのことを二つ行う」との約束をしていたので、「それを護りなさい」と王に迫り、こういう。

愛しきわが君はお聞き届けくだされ まずわが子バラタを皇太子に。

両掌を合わせてこの通り もう一つのお願ひも叶えください。

ラーマを出家・行者の衣で都から追ひ 十四年のあいだ森に住ませられませ。

かくも酷き望みを聞きし王は 月光にあたりし鴨のごとく悲嘆せり。

(ドーハー 29 の チャウパーイー 1、2)

ダシャラタ王はカイケーイー妃の言い分を聞きいれ、ラーマは妃のスィーターと弟ラクシュマナを連れて十四年のあいだ森に住むべく都アヨーディヤを離れる。

ラーマとラクシュマナとスィーターは、シヴァ神に礼をして馬車に乗る、

御者の大臣スマントラは、その馬車を森に進めゆく。

(ドーハー 85)

そしてラーマ一行はチトラクータ山の近くの森に住む。

この川岸はよきところなれば ここに棲む手だてをとラーマは弟君に。

ラクシュマナが川北の台地を見れば 弓形の小川が台地を囲む。

浄河は弓で心と理と慈悲が矢 末世の罪業は弓矢の的。

チトラクータ山は狩人さながらに 狙いを外さずしかと射止める。

(ドーハー 133 の チャウパーイー 1、2)

一方でダシャラタ王は「ラーマ、ラーマ」と叫びながら他界する。

ラーマよラーマと叫びつつ、ラーマ ラーマとまた叫び、

ラーマのいない毎日に耐えられず、ダシャラタ王は他界せり。

(ドーハー 155)

絵③

ところでラーマが森に去るときに都を留守にしていたバラタは、呼びもどされてダシャラタ王の葬儀を行ったあと、森に来てラーマに会う。バラタはラーマに「都に帰り国を治めてください」と頼むが、ラーマはそれに応ぜずに「わが履き物を玉座に置き、バラタが十四年のあいだ国を治めよ」と命じる。バラタはラーマの命に従い、ラーマの履き物を玉座に置き国を治める。

バラタは控え目で師や大臣もいるなかで ラーマはバラタへの愛でいっぱい。

そしてラーマは己の履き物を渡す バラタはそれを頭上に戴く。

(ドーハー 316 の チャウパーイー 3)

大臣とヴァシシュタ師とバラタに国を任せ ジャナカ王は自分の国に還りゆく。

都の人らはヴァシシュタ師の教えに従い ラーマの都アヨーディヤを治める。

(ドーハー 322 の チャウパーイー 4)

こうして第Ⅱ編の「アヨーディヤ編」は、現状への悲しみと将来への希望が入りまじったなかで幕を閉じる。

### 第Ⅲ編 「森林編」の梗概と詩の邦訳

ラーマと妃スィーターと弟ラクシュマナは、チトラクータの森に住むようになる。

ラグ族の長はチトラクータの森に住み 聞くだけで甘露のごとき心地よきことをなす。

われらがこの森にいると知り みなが会いに来るとラーマは察す。

(ドーハー 3 の チャウパーイー 1)

森で一行が質素に暮らす。そしてラーマはラーヴァナがスィーターを攫いにくることを知り、スィーター妃を火の神に委ねる。

夫に尽くし品格が優れしスィーターよ われラーマは遊戯をなす。

なれを火のなかに住ませむ われが羅刹を滅ぼすまで。

ラーマが説くあいだにスィーターは ラーマの御足を胸に火の神に抱かる。

スィーターは自分の影をそこに残す 品格も姿もスィーターそっくりな。

(ドーハー 24 の チャウパーイー 1、2)

ラーマが想定したとおりに、ラーヴァナはラーマとラクシュマナが留守のときをねらってスィーター妃を車で攫う。そしてラーマとラクシュマナが庵に戻ると、スィーター妃がいない。

ラーヴァナはスィーターを車に乗せて 恐怖に慌てふためき先を急ぐ。

スィーターは嘆きつつ空を行く 水にはまった鹿のごとく嘆きつつ。

(ドーハー 29 ka の チョウパーイー 12)

そこでラーマは弟とともに ゴーダーヴァリー川の畔の自らの庵に行けり。

庵を見るとスィーターの姿はなく ラーマは並みの人間のように取りみだす。

(ドーハー 30 の チョウパーイー 3)

こういう悲劇のうちに、第Ⅲ編の「森林編」が終わる。

## 第Ⅳ編 「猿国編」の梗概と詩の邦訳

ラーマとラクシュマナは帰ってきて、妃スィーターが羅刹ラーヴァナに攫われたと知り、彼女を探しに行く。その途上で修行僧に扮した猿の武将ハヌマーンに会い、ラーマがそこに来た理由を話す。

森で羅刹がスィーター妃を攫う ゆえにわれらは妻を探しにここに来た。

ここに来たわけをわれらは話せり 修行中の僧がここに来たわけを話されよ。

ハヌマーンはラーマと知り御足を戴く ハヌマーンの幸いは描ききれぬ。

身体は喜びで震え言葉を発せず 主ラーマの見事な衣装を拝す。

(ドーハー 2 の チャウパーイー 2、3)

またそこにいた禿鷹がハヌマーンに、ランカー島の場所、その島のアショーカの庭にスィーター妃がいると報せる。

トリクータ (三峰山) のうえにランカー島があり そこに怖れを知らぬラーヴァナ王がいる。

そこにアショーカ (無憂) という名の庭があり スィーター妃はいまもそこにいる。

(ドーハー 28 の チャウパーイー 6)

そこで猿の武将ハヌマーンは、羅刹ラーヴァナの支配するランカー島に行く。

こうして第Ⅳ編「猿国編」は、悲しみのなかに希望が見えてきたという語りで終える。

## 第Ⅴ編 「美麗編」の梗概と詩の邦訳

ランカー島に入ったハスマーンは、ラーヴァナにより幽閉されたスィーター妃を島の庭で見かける。ハスマーンはラーマから預かってきた指輪をスィーター妃に投げ、自分がラーマの配下だと報せる。

スィーターが見事な指輪を見ると　そこにラーマの名が美しく刻ってある。

指輪を見てラーマが付けていたものと知り　スィーター妃は喜びと悲しみで混乱する。

(ドーハー 13 の チャウパーイー 1)

それからハスマーンはランカー島を燃やし、スィーター妃にしばしの別れを告げる。そのときハスマーンは「あとで必ずラーマが妃を助けにくる」と言い、スィーター妃にこう求める。

われになにか印(しるし)の品を与えたまえ　あなたに渡すよう主が指輪を託したように。

髪飾りを外してスィーター妃は渡す　風の子ハスマーンは喜びを受けとる。

(ドーハー 27 の チャウパーイー 1)

ハスマーンから島の様子とスィーター妃が無事だとの報告を受け、ラーマは猿や熊の軍勢を連れてランカー島を望む海岸に立つ。

このようにして慈悲に満ちたラーマ、ランカー島を望む海の岸に立つ、

熊と猿の軍勢は、海岸で果実を沢山 食しけり。 (ドーハー 35)

羅利ラーヴァナの妻マンドーダリーが、ラーマに立ち向かうのは無謀だと諫め、攫って来たスィーター妃をラーマに還すがよいと言うが、ラーヴァナはそれに耳を傾けない。

ラーヴァナ王の足に縋り妻は願う、子供のようなこの願いを聞きいれなされ、

スィーター妃をラーマに還しなされ、ラーヴァナ王に不幸がなきように。 (ドーハー 40)

第Ⅴ編「美麗編」はこのように、ラーマと猿の武将ハスマーンが活躍し、羅利ラーヴァナが強がるなかで終末を迎える。

## 第Ⅵ編 「ランカー編」の梗概と詩の邦訳

ラーマは猿と熊の軍を率いてランカー島に入ったあと、軍の兵卒を寛がせる。

海を渡りラーマは宿営を張り　猿らみなにこう命令す。

好きな果実と根茎を食べよ　命令を聞いて熊と猿は方々に走る。

(ドーハー 5 の チャウパーイー 2)

そのあとでラーヴァナとラーマの軍の猿と熊のあいだで何度か戦闘があったが、猿と熊の軍はラーヴァナの十ある頭を落とせずにかれを生きのびさせる。そこでラーマがラーヴァナと対決することになり、ラーマは羅利ラーヴァナを殺す。

弓を耳まで引いた主ラーマは、三十一の矢を放つ、

ラーマの放てるそれらの矢は、毒蛇のごとく飛びにけり。 (ドーハー 102) 絵④

こうしてランカー島の王ラーヴァナを倒したラーマは、ラーヴァナの弟ヴィビーシャナをランカー

の王位に就かせる。

ラーマの命で猿たちはすぐに行き 即位式の支度を全てなす。

ヴィビーシャナを王座に座らせ 即位式を行い誉め讃える。

(ドーハー 106 の チャウパーイー 2)

そしてラーマ自らは花の船に乗って、都アヨーディヤーに向う。

天空の船が発つときに大きな声が湧きおこる みな「ラーマに栄光あれ」と叫ぶ。

船には高くて立派な玉座があり そこにスィーター妃と主ラーマが座る。

妃とラーマが玉座に座すさまは輝かしく スメール山頂の雲に雷が光るがごとし。

天空の美しき船は速く進み 神々が歓び花の雨を降らせる。

(ドーハー 119 ka の チャウパーイー 2、3)

第Ⅵ編「ランカー編」はこのように、さまざまな困難を乗り越えたラーマらがラーヴァナを成敗して都アヨーディヤーに向うところで終わる。

## 第Ⅶ編 「後編」の梗概と詩の邦訳

天空の美しい船で都に還ったラーマは、弟バラタや聖仙らに歓迎される。

バラタ王子とともにみながそこに来る ラーマとの別離でみな痩せ細った身で。

ヴァーマデーヴァ聖仙とヴァシシュタ聖仙に会い ラーマは弓と矢を大地に置く。

(ドーハー 5 の チャウパーイー 1)

都でラーマは亡き父のダシャラタ王のあとを継ぎ、空白を埋めていたバラタ王子に代わり王位に就く。

優しき声で僧らはこう言う ラーマの戴冠式はこの世を幸せにすると。

聖仙は遅れることなく大王の 戴冠式を行いたまえとも言う。

(ドーハー 10 ka の チョウパーイー 4)

ラーマの左にスィーターが座る、美しく徳に富むスィーター妃が、

その姿を見て王妃の母らはみな歓び、この世に生れたことを幸せに思う。

絵⑤

(ドーハー 11 kha)

そしてラーマ王と王妃スィーターのあいだに、双子の王子が授かる。

昼も夜も創造神に願い ラーマの御足への愛を望む。

スィーター妃から生れた二人の王子 ラヴァとクシャは聖典と古譚に詠われる。

ラヴァとクシャは勇ましくて徳に富み ラーマの生き写しのごとき美しき。

弟たちにも二人ずつの息子が生れ 息子らはみな徳と礼節に富む。

(ドーハー 25 の チャウパーイー 3、4)

16世紀のトゥルシーダースがヒンディー語のアワディー方言で詠った『ラーマの行いの湖』は、こうしてみなが歓びに包まれるなかで終わる。

## 付記

この『ラーマの行いの湖』の梗概と詩の邦訳をよりよく理解するうえで、つぎの拙稿が役立つ：  
「トゥルスィーダースの『ラーマの行いの湖』は、ヴァールミーキによる古代叙事詩『ラーマヤナ』を参酌するところがのだが、ほかのラーマ物語をも参照して16世紀の北インドの人々の望みを叶えたいらしい」

拙稿は、東京外国語大学の水野 善文教授が主宰する研究会で、2016年の春にラーマ物語に関心を持つ研究者に呼びかけて配った文書を抜粋したものであり、未刊のままである。そこでこの未刊の『ラーマの行いの湖』成立に関する拙稿の要旨を、つぎに示す。

ヴァールミーキが著した『ラーマヤナ』(中村 了昭 訳『新訳 ラーマヤナ(1)~(7)』平凡社 東洋文庫、2012-2013)が、筋書きや編(巻)の構成などで、トゥルスィーダースが16世紀に詠じたラーマ物語に大きな影響を与えたことは確かである。王や王妃たちや王子らの行動も、古代叙事詩とトゥルスィーダースのラーマ物語で同じように描かれていることが多い。

一方でジャヤデーヴァが14世紀(?)に作った戯曲 *Prasannarāghava* (『ラーガヴァ族のラーマの喜悦』)や作者不詳で13-15世紀に書かれたラーマ物語 *Adhyātmārāmāyaṇa* (『ヴェーダーンタ思想のラーマヤナ』)も、『ラーマの行いの湖』の形成に大きな役割を果たしたらしい。

上記の二作品については、下記の文献から引用した：

Jaydeva, *Prasannarāghava*. (筆者未見につき本稿冒頭の「参考文献」の Stasik による)。

Munilāl (tr.). *Adhyātmārāmāyaṇa Hindī-anuvād sahit*, Gorakhpur: Gītā Pres, 1967. = 『アドヤートマラーマヤナ』の原文を左側に、そのヒンディー語訳を右側に記載した書。

二つの作品は、ヴァールミーキの『ラーマヤナ』とは異なる展開を示している場合がある。その例をいくつか示そう：

- ① 第I編「幼年編」のはじめ：生れたばかりのラーマは、神であるが赤子にもなる (*Adhyātmārāmāyaṇa* I 巻 = I 編-3 章-14~35句)。
- ② 第I編のなかごろ：ラーマとスィーターは、結婚まえにおたがいの姿を見て惹かれあう (*Prasannarāghava*. Stasik, *The Infinite Story* p.76)。
- ③ 第III編「森林編」のはじめ：森林に行ったスィーター妃が、ラーマの手で火の神に預けられ、そこに残ったのは幻のスィーター妃である (*Adhyātmārāmāyaṇa* III 巻 = III 編-7 章-1~5 句)。したがって羅刹ラーヴァナに攫われたのは、現実の妃ではなく「幻のスィーター妃」である。
- ④ スィーター妃はヴァールミーキ版『ラーマヤナ』のI巻-66章-13~14(中村訳のp.283)で、敵の溝スィーターから見出されたためにスィーターの名でジャナカ王の娘として育てられたという趣旨を、ジャナカ王がラーマらに語っている。そのためヴァールミーキ版の終末のVII編(中村訳「第七巻 後続の巻」)では、地中から女神が現れてスィーターを腕に抱きとめて地中に沈む(97章)とされている。しかし *Adhyātmārāmāyaṇa* やトゥルスィーダースによる『ラーマの行いの湖』には、どこにもそういう記述がない。

こうして16世紀に詠われた『ラーマの行いの湖』は、ヴァールミーキのラーマ物語を土台にしなが  
らも、その後のラーマ物語の趣旨をも採り入れ、16世紀の北インドの人々の望みを叶える作品と  
なったのであろう。

なお Stasik によると、トゥルスィーダースは西暦1532年に生れ1623年に没し、かれの主たる作品  
『ラーマの行いの湖』は西暦1574年にアヨーディヤーで詠われはじめ、数年後にバナーラスで完成し  
たとされる。

(完)

## ラーマの生涯の主要場面の絵



絵1：ダシャラタ王の三人の妃に、ラーマら四人の王子が授かる。



絵2：強弓を折った勇者ラーマに、ジャナカ王の姫スィーターが花環をかけて婿に選ぶ。



絵3：ダシャラタ王は、ラーマを森に行かせねばならなかった心痛から、世を去る。



絵4：ラーマが十の頭を持つ羅刹の王ラーヴェナと、戦で対決して勝利をおさめる。



絵5：ラーマは妃のスィーターを従えて、戴冠式に臨む。

絵の出所：Tivārī, D. & Mīśra, S., *Śrī Tulsī kṛt Rāmāyaṇa*, Kāśī: Durgāprasād Kaṭāre, Samvat 1926 (A. D. 1869). = D. ティワーリーと S. ミシュラ、『トゥルシー作ラーマヤナ』、カーシーのドゥルガープラサード・カターレーがヒन्दウー暦1926年（西暦1869年）に刊行。

絵の説明は、本文を参考にして坂田がおこなった。